

＜第 144 回国際 ARC セミナー(河角直美氏・加藤政洋氏)レビュー＞

写真資料にみる1950年代沖縄の社会と景観

宮原 佑成(立命館大学文学研究科)

E-mail lt1434ps@ed.ritsume.ac.jp

1. はじめに

本稿は、2025 年 1 月 8 日に開催された「第 144 回国際 ARC セミナー」における河角直美氏¹⁾・加藤政洋氏²⁾(以下、河角氏・加藤氏)による共同発表「写真資料にみる 1950 年代沖縄の社会と景観」の内容を報告するものである。

本発表では、歴史地理学を専門とする両氏が、1950 年代の沖縄が記録された写真資料³⁾を取り上げ、それらの分析手法・活用方法についていくつかの事例をもとに論じられた。以下では、発表の構成に即してその要点を整理する。

2. 「隅田建設」のフォトアルバムの分析

2-1. 米軍基地建設の開発と風景

加藤氏は、嘉手納基地建設を写した記録写真集を手がかりに、基地内の住宅地区における開発の様相を明らかにした。紹介されたのは、本土から基地建設に参入した中堅建設業者・隅田建設⁴⁾が 1950 年代初頭に撮影した記録写真である。

嘉手納基地は、沖縄県沖縄市・嘉手納町・北谷町にまたがる極東最大のアメリカ空軍基地である。フェンスで囲まれた基地内は、軍事と生活の機能に応じて、空間的に明確な分化がみられる。たとえば、滑走路、駐機場、格納庫などの軍事的な施設は主として嘉手納町・北谷町側にある一方で、沖縄市側には軍人・軍属、その家族の住宅地区が設けられ、兵舎や家族住宅に加えて、商業施設や娯楽施設といった生活基盤が基地内で完結するように整備されている。

こうした住宅地区において、275 棟の家族住宅建設を請け負ったのが隅田建設であった。米軍基地建設をはじめとするいわゆる「沖縄工事」への参入は、当時の建設業界のなかで「特需」とも形容される経済的恩恵をもたらすものであった⁵⁾。

隅田建設が撮影した 171 枚の写真は、家族住宅の建設の工程や構造的特徴が記録されている。これらの写真はたんなる工程の記録にとどまらず、当時の建設現場の実態や技術の水準、さらには労働環境までもを伝える貴重な一次資料である。

なかでも注目されるのは、重機をもちいた大規模な地形改変のプロセスである。労働者たちはブルドーザーやショベルカーといった重機によって平坦地を造成し、道路や住宅区画の基盤を整備する。本土では当時、重機の使用はまだ一般的でなかったことから、これらの写真は沖縄で体得した新しい経験や技術を記録するものであったと考えられる。その一方で、機械の導入がみられるなかでも、瓦葺きや外装などの軽作業はすべて手作業でおこなわれていた。そこには女性労働者の姿も確認される。こうした点から、当時の労働構造の一端をもみてとることができるのである。

また、建築過程を写した複数の写真からは、住宅に使用された建築資材の特徴も明らかとなった。多用されていたのは、耐久性に優れた鉄筋コンクリートや琉球赤瓦である。米軍による沖縄基地建設の一つの目的は、台風に耐えうる恒久的な住宅を築くことであった。実際に、当時建設された建物の多くは、70 年以上経過した現在においてもその姿をとどめており、建築技術の高さを物語る。

フォトアルバムの後半には、完成した住宅や地区内を広くとらえた写真も収められている。加藤氏は、写真同士をつなぎあわせるパノラマ加工によって、地区の全体像を浮かび上がらせた。これらからは、すべての住宅が一律の規格で建てられたのではなく、外観や構造、さらには屋根の向きに差異がみられることがわかる。また、建設も一斉におこなわれたのではなく、時期的なずれがあったことも明らかとなった。

加藤氏は 2017 年にこのアルバムを基地の所在する沖縄市に寄贈し、地元紙を通して公表した。その際には、地元住民を中心に多くの反響が寄せられたという。写真を契機として過去の記憶が喚起され、人々のコメントや証言を引き出す契機となった点においても、本資料は社会的な価値を有するものと評価できるだろう。

2-2. 撮影地点の特定と景観分析

続いて河角氏は、アルバムに収められていた 1 枚の写真(図 1 上)を例に、基地内における景観分析の方法論、とりわけ写真の撮影地点をどのように特定するかというプロセスについて紹介した。

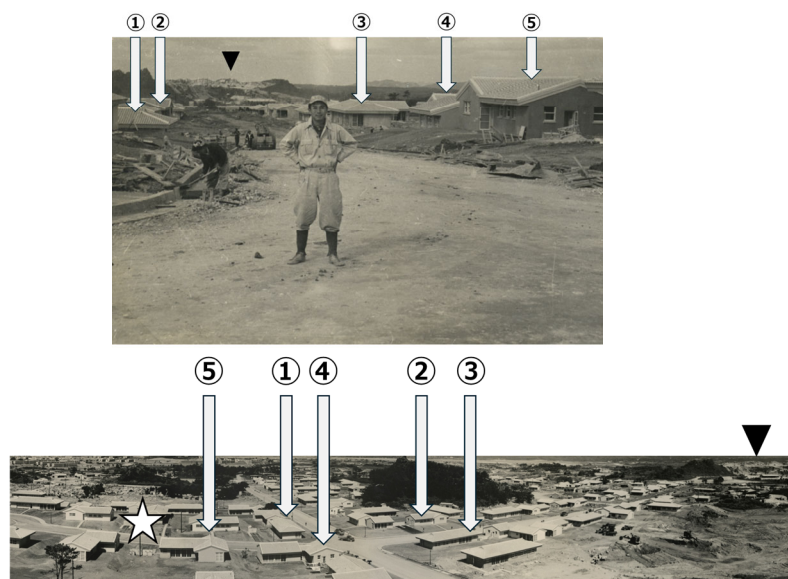


図 1 撮影地点の特定方法
(河角氏により作成、☆は撮影地点を示す)
(沖縄市総務部総務課市史編集担当所蔵)

写真には、整備されたばかりとみられる基地内の道路に立つ男性の姿が写されている。撮影地点を特定するにあたって河角氏が注目したのは、男性の背後に見える、造成によって山肌が露出している斜面であった(図1上▼)。河角氏は、この特徴的な地形が他の風景写真にも写りこんでいることに気づき(図1下▼)、これらの写真が対応していることを見出す。

この地形的な手がかりをふまえ、撮影地点のより精緻な特定に向けて鍵となるのが、背景に見える建物の形状である。前節において加藤氏が述べたように、基地内の家族住宅はそれぞれ屋根のかたちや建物の向きが異なっており、識別のための重要な手がかりとなる。河角氏はそうした建物の形状を精密に分析し、「その場所に立ったときに何が見え、何が見えないか」という視点から、視野の構成を論理的に検討していった。まるで自らが写真の撮影者としてその場に立っているかのように、建物①～⑤の位置関係を突き合わせた結果、図1上下2枚の写真において建物配置が対応していることを確認し、最終的に撮影地点は図1中☆の位置であると結論づけた。

基地内の景観分析における課題の一つは、民間人の立ち入りが制限されるため現地でのフィールドワークによる確認が困難であるという点である。こうした制約に対処する手段として、河角氏はGoogleマップの空中写真に備わる3D表示機能を活用している。これにより視点の高さや方向を再現し、撮影地点を検証することが可能となる。

こうした綿密な分析方法に加えて、河角氏のテンポのよい説明からは、彼女のもつ空間感覚の鋭敏さが伝わってくるように感じた。

3. 「石野径一郎写真群」の分析

次に紹介された写真資料は、小説『ひめゆりの塔』の作者として知られる石野径一郎(いしのけいいちろう:1909-1990)が所蔵した約200枚の写真群である。これらは沖縄各地の風景写真が綴られたものであるが、写真には撮影対象、撮影地点、撮影時期が不明なものが含まれていた。河角氏は、そうした欠落した情報をいかに特定していくかという方法論的な検討をおこない、写真資料の新たな活用可能性を示した。

3-1. 場天港の例

はじめに、例として取り上げられたのが、次の写真である。



図2 石野径一郎写真群の一枚

この写真の撮影地点の特定にあたって、河角氏はまず、写真のなかの海岸線の曲線、背後の丘陵の標高、集落の位置関係に注目した。彼女はこれらの要素

をもとに、米軍作成の旧版地形図を参照しながら、戦後の埋め立てによって変化する以前の海岸線の形状を確認する。また、ここでも Google マップが提供する空中写真の 3D 表示機能を活用し、現在の地形との照合を試みる。こうした検証のプロセスを経て、図 2 は現在の南城市にあたる旧佐敷村の港町・馬天(ばてん)を撮影したものであると結論づけた。

こうした作業にあたっては、写真分析を補助する資料として、過去の住宅地図、観光ガイドブックや商工名鑑などといった文献資料、さらには沖縄県公文書館や那覇市歴史博物館が提供するデータベースを挙げている。このように、時代や媒体を問わず、複数の資料を組み合わせることで、効果的な分析ができる。そして、「過去を探るうえで、現在においても地形を確認することが重要」と、フィールドワークの重要性を強調した。

なお、河角氏は別稿において、石野の写真資料にくわえていくつかの文献資料を組み合わせながら馬天地域の戦後復興と地域社会の変容についても詳細に論じている⁶⁾。より深い理解のために、そちらも参照されたい。

3-2. 那覇の例

続いて提示されたのは、那覇市の中心市街地を写した 2 つの景観写真である。

目抜き通りである「国際通り」の様子をとらえた写真においては、とくに撮影時期をいかに推定するかが重要となる。その際、写真に写り込んだ建造物や看板に記された文字情報は、時期特定のための重要な手がかりである。たとえば、店舗名が確認できれば、それを地図資料と照合することで、当該地図の作成年を基準に撮影時期を推測することが可能になる。また、何気なく掲げられている映画の宣伝広告であっても、作品の公開時期を調べることで、撮影時期を絞り込むことができる。

最後に提示されたのは、小高い地点から那覇市を見下ろした写真である。河角氏は、撮影時期の推定に加え、これまでに紹介された、地形図を用いた高低差の把握、空中写真の活用、さらには屋根の形状への着目といった分析手法を総動員し、撮影地点の解明にせまった。こうして特定された地点(現在の平和通り商店街付近)は、その後の都市開発により地形や景観が大きく変化し、現在では現地から同様の視界を得ることが困難となっている場所であった。こうした状況下での正確な分析は、高く評価される。

3-3. 景観分析と写真資料

報告の総括として河角氏は、過去の景観に詳細な分析を加える意義について改めて言及した。写真に写り込んだ建物や看板などの情報から撮影時期や場所を特定、あるいは推測することで、かつて存在した景観の復原を試み、失われつつある地域の記憶を掘り起こ

し、つなぎ直すことに研究の価値があると述べる。そのうえで、写真資料は当時の空間性や歴史性を読み解く重要な手がかりとなることが再確認された。

このように、写真資料の分析にもとづく研究の有用性と、写真を通じて過去の空間に接続しようとする歴史地理学のアプローチの社会的意義が示されたかたちで、発表は締めくくられた。

4. おわりに

発表後の質疑応答では、基地建設に関わる質問や、美術作品にみられる地理的なモチーフの特定方法といった隣接分野への応用の可能性、所蔵資料のデジタルアーカイブ化を含めた今後の展望など、多岐にわたるテーマが積極的に議論された。これは、本発表が提示した方法論が、他分野にも通じる拡張性を有していることの証左であろう。

以下、筆者のコメントを付して稿を閉じたい。本発表は写真に写し込まれた風景を多角的に読み解こうとする試みであり、その根底には地形や景観への鋭い観察をはじめとする、地理学的視点に基づいた実践と工夫が随所に感じられる。とりわけ、地形図や空中写真を用いて撮影地点や空間的文脈を丁寧に復原していく実証手段は、今後の研究にも多くの示唆を与えるものであろう。

報告のなかで筆者が関心をもったのは、写真資料の「象徴性」という観点である。発表のなかで加藤氏は、同じアルバムの中に綴られた 2 枚の写真を紹介した。ひとつは基地内に整然と建てられた現代的な家族住宅、もうひとつはその「一歩外」に広がる粗末な住居をうつしたものであった。このような対比的な風景写真は、1950 年代沖縄の社会的格差の現実を帯びたものである。情報が欠落している写真に対して、写されている風景や被写体を地理的・歴史的な文脈に位置づけるうえでは、本発表で示された「何が写されているか」を実証的に明らかにする作業が不可欠であるが、同時に、「それが何を意味しているのか」、「どのように読まれ、記憶されるか」という視点も重要になるだろう。

両氏の今後のさらなる研究と展開に期待したい。

[注]

- 1) 立命館大学文学部地域研究学域教授
- 2) 立命館大学文学部地域研究学域教授
- 3) 現在は沖縄市総務部総務課市史編集担当が所蔵する。
- 4) 現存していない。
- 5) 加藤政洋「一九五〇年代沖縄における基地建設と本土建設業者一隅田建設を中心に一」、六八六号、二〇二三年、一一一七頁。
- 6) 河角直美「一九五〇年代沖縄のスクラップ・ブームと地域変容—馬天港の場合—」、立命館文学、

六九二号、二〇二五年、一一一二頁。